

# 幼児期の被養育・被保育体験が養育者・保育者への好感度と自身の幼児との関わりに与える影響

吉澤 千夏\*・成田 鮎子\*\*

(平成30年1月31日受付；平成30年2月13日受理)

## 要 旨

本研究は、幼児期の被養育・被保育体験が養育者・保育者への好感度、自身の幼児への関わりに与える影響について検討することを目的とした。幼児期の被養育・被保育体験を有する大学生に対して質問紙調査を行い、大学生による幼少期の想起、その大学生自身の現在の幼児への関わりの想起と評価による回答を得た。分析の結果、以下のことが明らかになった。

(1) 幼少期においても現在においても、養育者・保育者への好感度は高かった。また、養育者・保育者のいずれもが、自分に対して情緒的で受容的な関わりをしたと認識していた。

(2) 幼少期の被養育・被保育体験と養育者・保育者への好感度の関連においては、ふさわしい関わり方とされるような養育・保育を受けたと対象者側に認識されることが、養育者・保育者の別に関わらず、好感度を高める一要因となることが明らかになった。

(3) 幼少期の被養育・被保育体験と自身の幼児への関わりの関連においては、ふさわしい関わり方とされるような養育・保育を受けたという対象者の実感と、現在、対象者が行っている幼児への関わりには部分的に関連があり、被養育・被保育体験が大学生の幼児への関わりに投影される一面があることが明らかになった。また、対象者にとって、養育者よりも保育者の方が幼児と関わる上でのモデルに近い存在であることが示唆された。

## KEY WORDS

university student 大学生, child 幼児, early childhood 幼児期, self-recognition 自己認識, experience of be cared 被養育・被保育体験

## 1. 緒言

ヒトの子どもは、周囲の人々に養育・保育されることを通して、その生命を維持し、心身を発達させていくことが可能となる。その点において、養育・保育する者は子どもの育ちにとって欠くことのできない、非常に重要な存在であり、子どもにとっての親や祖父母などの家族、保育者等がその役割を担うことが多くみられる。

では、養育・保育する者は、いかにしてその養育・保育する術を獲得してきたのだろうか。学校教育においては、「家庭」がその役割を担っており、例えば平成29年3月に公示された『中学校学習指導要領』の第2章第8節「技術・家庭」の「家庭分野」においては、子どもの育ちと生活について、それを支える環境としての家族との関係の中で理解させることを求めている<sup>(1)</sup>。また、現行の学習指導要領においては、子どもの育ちに対する家族及び地域や社会の果たす役割について認識させることとしている<sup>(2)</sup>。これを具体化するために、「中学校技術・家庭」の「家庭分野」の教科書<sup>(3)(4)(5)</sup>においては、「自分自身の幼児期の想起」「幼児の発達についての学習」「ふれ合い体験の準備と振り返り」といった内容が盛り込まれ、幼児に関わる学習の一層の充実が求められている。保育学習における「自分自身の幼児期の想起」については、①周囲からの肯定的関係構築の努力の快さ②そのように子どもに働きかけることの重要性、が挙げられており<sup>(6)</sup>、自身の幼児期の体験と比較しながら幼児理解を深めていく学習が展開されている。さらに「家庭」における幼児との関わりに関する学びは、幼児とのふれ合い体験という形で行われることが多く、その体験が子ども理解を学生に促すこと<sup>(7)</sup>、幼児への共感的応答性の発達に対して影響を与えること<sup>(8)</sup>、子どもから受けるポジティブな刺激が生徒の人間関係に影響すること<sup>(9)</sup>等も明らかにされており、「家庭」における保育学習の様々な効果が期待されている。

一方、いかに子どもと関わるかといった具体的な養育・保育場面における振る舞いは、自らがどのような体験を経てきたかによるものが大きい。例えば、子どもを育てるときの様々な身振り等については、そもそも養育者が被養育

者つまり子どもだった際に、自分の養育者との関係の中で行われてきた行為が伝承され、自分が養育者となったときにその子どもに対して行われているという指摘がある<sup>(10)</sup>。また、青年期女子の良好な子どもイメージ形成については、乳幼児との接触経験とともに家族のありようが深く関係することが明らかになっている<sup>(11)</sup>。このことから、幼児への関わりに関する自身の方法やその基になる子ども観・保育観には、自身の育てられた体験が大きく関わっていることが考えられる。

そこで本研究は、大学生による幼少期の想起を通じて、養育者に育てられてきた被養育体験、保育者に育てられてきた被保育体験と自身の養育者・保育者への好感度、現在の幼児への関わりについて調査・分析を行い、被養育・被保育体験が養育者・保育者への好感度及び自身の幼児への関わりに与える影響を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象

対象者は新潟県内のJ大学に在学し、1年生の必修科目「家庭」を受講する学生215名である。

### 2.2 調査方法

調査時期は2016年6月である。著者のうち1名の講義終了後に無記名式調査用紙を配布し、その場で回答するよう依頼した後、回収を行う。

### 2.3 調査紙の構成

調査紙は、以下の内容で構成されている。

①対象者の属性：対象者の性別、学年、年齢、子どもの有無、幼児との接触頻度。

②対象者の幼少期における養育者への好感度と被養育体験

対象者にとって最も身近な養育者（1名）、その養育者への幼少期の好感度（5件法）、その養育者が対象者にどのように関わったか（表1）、その養育者への現在の好感度（5件法）。

③対象者の幼少期における保育者への好感度と被保育体験

対象者にとって、保育者は身近な存在であったか（3件法）、保育者へのその当時の好感度（5件法）、保育者が対象者にどのように関わったか（表1）、その養育者への現在の好感度（5件法）。

④対象者自身の幼児との関わり：対象者自身の幼児との関わりについて（表1）（5件法+その他：自由記述）。

幼児との関わりについての項目は、中学校における「家庭」の学習との関連を考慮し、「中学校学習指導要領解説編 家庭」<sup>(12)</sup>と中学校「家庭」教科書<sup>(13)(14)(15)</sup>の「家族・家庭と子どもの成長」の該当箇所内にある「幼児との関わりにおいて気をつけること」についての内容を基に作成する。項目数は全14項目である（表1）。この項目を用いた対象者の幼児への関わりの自己評価については、「とてもよく当てはまる」を「5」、「まあ当てはまる」を「4」、「どちらでもない」を「3」、「あまり当てはまらない」を「2」、「まったく当てはまらない」を「1」とする5段階評定で回答を求めることとする。この項目を用いた「最も身近な養育者はあなたにどう関わりましたか」「保育士・幼稚園教諭はあなたにどう関わりましたか」については、対象者が受けたと感じている関わりすべてを選択するよう、回答を求める。

また、養育者・保育者への好感度については、「とても好きだった」を「5」、「まったく好きではなかった」を「1」とする5段階評定で回答を求める。

本調査紙ではその他にも、「保育体験等での年長者との関わり」「対象者自身がふさわしいと考える幼児との関わり」の質問も行っている。しかし、本稿ではその点については言及しないため、これらの説明は省略する。

表1 「中学校学習指導要領解説編 家庭」（文部科学省）及び中学校「家庭」教科書（開隆堂、東京書籍、教育図書）による幼児との関わり（14項目）

|              |               |              |
|--------------|---------------|--------------|
| 幼児のペースを大事にする | 分かりやすい言葉で話す   | 幼児を認める言葉をかける |
| 表情豊かに接する     | 楽しく遊べるように工夫する | 目の高さを合わせて接する |
| 忍耐強く付き合う     | 幼児の意思を尊重する    | 個人差や個性を認める   |
| 年齢・年齢に応じて関わる | 危険を取り除く       | 幼児の自立の手助けをする |
| 愛情を持って関わる    | その子に合った関わりをする | その他(自由記述)    |

### 3. 結果及び考察

#### 3.1 対象者の属性

対象者の性別は男性118名 (54.9%)、女性96名 (44.7%)、不明1名 (0.5%) であり、対象者の平均年齢は19.5歳 (SD=2.2) である。研究対象者のうち「子どもがいる」と回答する者はなく、本研究は「子どもがいない」者が対象者となる。

また、幼児との接触頻度については、「ほとんどない」と回答する者が177名で最も多く (82.4%)、次いで「月に数回」が32名 (14.9%)、「週に数回」4名 (1.9%)、「その他」2名 (0.9%) の順となっている。このことから、対象者の多くは回答時点において、幼児との関わりを持つ機会をあまり持っていないといえる。

#### 3.2 対象者の被養育体験と幼少期の養育者への好感度との関連

ここでは、対象者の幼少期において最も身近な養育者が誰であったかを明らかにするために、「最も身近な養育者は誰でしたか。1人を記入してください」の質問への回答を求める。最も多いのは「母」

表2 最も身近な養育者 n=215

| 養育者   | 父       | 母          | 祖父      | 祖母        | その他     |
|-------|---------|------------|---------|-----------|---------|
| n (%) | 9 (4.2) | 168 (78.1) | 4 (1.9) | 30 (14.0) | 4 (1.9) |

の168名 (78.1%) で、次いで「祖母」30名 (14.0%)、「父」9名 (4.2%)、「祖父」が4名 (1.9%) である (表2)。また、その他の回答は、「父母」が1名 (0.5%)、「祖父母」が3名 (1.4%) である。「母」「祖母」との回答は合わせて9割を超えることから、対象者にとって最も身近な養育者は「母」「祖母」といった女性であったといえる。

次に、対象者の養育者への好感度が幼少期どのくらいであったかを明らかにするために、「その人のことをあなたは好きでしたか」の質問への回答を求める。最も多い回答は「とても好きだった」

表3 幼少期の養育者への好感度 n=215

| 好感度   | とても好きだった   | まあ好きだった   | どちらでもなかった | あまり好きではなかった | まったく好きではなかった |
|-------|------------|-----------|-----------|-------------|--------------|
| n (%) | 136 (63.3) | 67 (31.2) | 5 (2.3)   | 7 (3.3)     | 0 (0.0)      |

136名 (63.3%) であり、「まあ好きだった」が67名 (31.2%)、「どちらでもなかった」が5名 (2.3%)、「あまり好きではなかった」が7名 (3.3%) である (表3)。「とても好きだった」「まあ好きだった」を合わせると203名であり、全体の9割を超える (94.5%) ことから、養育者のことを好きだった人が多いといえる。

さらに、対象者の幼少期の被養育体験について明らかにするために、「その人はあなたにどう関わりましたか。当てはまるものをすべて選んでください」の質問への回答を求める。上位5項目は、回答者の多い順に「愛情を持って関わった」(183名)、「表情豊かに接した」(142名)、「わたしの意思を尊重した」(140名)、「わたしを認める言葉をかけた」(126名)、「わたしの自立の手助けをした」(121名) であり、下位5項目は、回答者の少ない順に「目の高さを合わせて接した」(63名)、「分かりやすい言葉で話した」(93名)、「楽しく遊べるように工夫した」(93名)、「個人差や個性を認めた」(96名)、「月齢・年齢に応じて関わった」(101名) である (表4)。上位に挙げられる5項目は、「愛情を持って関わった」「表情豊かに接した」のように情緒的で、「わたしの意思を尊重した」「わたしを認める言葉をかけた」「わたしの自立の手助けをした」のように受容的な関わり方であり、下位となる5項目は「目の高さを合わせて接した」「分かりやすい言葉で話した」等のように、養育者による対象者の発達への配慮に基づいた関わり方であると考えられる。このことから、上位5項目のような情緒的で受容的な関わり方は幼少期の子どもに認識されやすい一方で、下位5項目のような養育者が対象者を配慮した関わり方は認識されにくいと推察される。

対象者の養育者への好感度が現在どのくらいであることを明らかにするために、「その人のことを今あなたは好きですか」の質問への回答を求める。最も多い回答は「とても好き」128名 (59.5%) であり、「まあ好き」が75名 (34.9%)、「どちらでもない」が6名 (2.8%)、「あまり好きで

表4 対象者の被養育体験 n=215

| 幼児への関わり方      | n (%)      | 幼児への関わり方      | n (%)      |
|---------------|------------|---------------|------------|
| わたしのペースを大事にした | 117 (54.4) | 分かりやすい言葉で話した  | 93 (43.3)  |
| わたしを認める言葉をかけた | 126 (58.6) | 表情豊かに接した      | 142 (66.0) |
| 楽しく遊べるように工夫した | 93 (43.3)  | 目の高さを合わせて接した  | 63 (29.3)  |
| 忍耐強く付き合った     | 116 (54.0) | わたしの意思を尊重した   | 140 (65.1) |
| 個人差や個性を認めた    | 96 (44.7)  | 月齢・年齢に応じて関わった | 101 (47.0) |
| 危険を取り除いた      | 107 (49.8) | わたしの自立の手助けをした | 121 (56.3) |
| 愛情を持って関わった    | 183 (85.1) | わたしに合った関わりをした | 107 (49.8) |
| その他           | 7 (3.3)    |               |            |

はない」が5名(2.3%),「まったく好きではない」が1名(0.5%)である(表5)。「とても好き」「まあ好き」を合わせると203名であり、全体の9割を超える(94.4%)ことから、養育者のことを比較的好きな人が多いといえる。幼少期の「とても好きだった」136名(63.3%),「好きだった」67名(31.2%)も合わせて203名(94.4%)であることから、幼少期においても現在においても、養育者への好感度は高いといえる。

表5 現在の養育者への好感度

n=215

| 好感度   | とても好き      | まあ好き      | どちらでもない | あまり好きではない | まったく好きではない |
|-------|------------|-----------|---------|-----------|------------|
| n (%) | 128 (59.5) | 75 (34.9) | 6 (2.8) | 5 (2.3)   | 1 (0.5)    |

さらに、対象者が幼少期に養育者にどのように関わられたと認識しているかと、そのときの養育者への好感度に関連があるのかを明らかにするために、「その人(主たる養育者)はあなたにどう関わりましたか」と「その人(主たる養育者)のことをあなたは好きでしたか」の回答について相関分析を行う。

分析の結果、14項目すべてにおいて有意な正の相関が認められる(表6)。このことから、項目に挙げたような養育者の幼児への関わり方と、幼児の養育者への好感度には関連があるといえる。

相関係数の強さに注目すると、「わたしの意思を尊重した」「愛情を持って関わった」の2項目にやや強い相関が認められる。このことから、対象者が自らの意思を尊重される、愛情を持って関わられるなど、養育者から大事に関わってもらえたと実感できることは、その養育者への好感度を高める要因となっていることが考えられる。

表6 対象者の被養育体験と幼少期の養育者への好感度との関連

一方、「目の高さを合わせて接した」「危険を取り除いた」の2項目では、有意ではあるもののほとんど相関はなく、幼児と関わる上での前提条件ともいえる関わり方・養育者の具体的な行動は、被養育者にとっては養育者への好感度を高める要因とはならないと考えられる。

|                           |            | その人(主たる養育者)はあなたにどう関わりましたか |               |               |               |
|---------------------------|------------|---------------------------|---------------|---------------|---------------|
| その人(主たる養育者)のことはあなたは好きでしたか | 項目         | わたしのペースを大事にした             | 分かりやすい言葉で話した  | わたしを認める言葉をかけた | 表情豊かに接した      |
|                           | 相関係数       | .325*                     | .287**        | .370**        | .319**        |
|                           | 項目         | 楽しく遊べるように工夫した             | 目の高さを合わせて接した  | 忍耐強く付き合った     | わたしの意思を尊重した   |
|                           | 相関係数       | .287**                    | .142*         | .252**        | .430**        |
|                           | 項目         | 個人差や個性を認めた                | 月齢・年齢に応じて関わった | 危険を取り除いた      | わたしの自立の手助けをした |
|                           | 相関係数       | .318**                    | .214**        | .156*         | .364**        |
| 項目                        | 愛情を持って関わった | わたしに合った関わりをした             |               |               |               |
| 相関係数                      | .437**     | .329**                    |               |               |               |

\* : p<.05, \*\* : p<.01

3.3 対象者の被保育体験と幼少期の保育者への好感度との関連

まず、対象者の保育者への好感度が幼少期どのくらいであったかを明らかにするために、「保育士・幼稚園教諭のことをあなたは好きでしたか」の質問への回答を求めている。最も多い回答は「とても好きだった」92名(42.8%)と「まあ好きだった」92名(42.8%)であり、これらを合わせると全体の8割を超える(85.6%)(表7)。このことから、幼少期において保育者のことを好きだった人は多いものの、幼少期における養育者に対する好感度(同様にして94.4%)に比べると、低いといえる。

表7 幼少期の保育者への好感度

n=215

| 好感度   | とても好きだった  | まあ好きだった   | どちらでもなかった | あまり好きではなかった | まったく好きではなかった |
|-------|-----------|-----------|-----------|-------------|--------------|
| n (%) | 92 (42.8) | 92 (42.8) | 25 (11.6) | 4 (1.9)     | 2 (0.9)      |

次に、対象者の幼少期の被保育体験について明らかにするために、「保育士・幼稚園教諭はあなたにどう関わりましたか。当てはまるものをすべて選んでください」の質問への回答を求めている。上位5項目は、回答者の多い順に「楽しく遊べるように工夫した」(155名)、「分かりやすい言葉で話した」(151名)、「表情豊かに接した」(139名)、「愛情を持って関わった」(126名)、「目の高さを合わせて接した」「危険を取り除いた」(それぞれ119名)であり、下位5項目は、回答者の少ない順に「月齢・年齢に応じて関わった」(72名)、「わたしの意思を尊重した」(75名)、「わたしのペースを大事にした」「忍耐強く付き合った」(それぞれ86名)、「わたしの自立の手助けをした」(89名)である(表8)。上位に挙げられた5項目は、「愛情を持って関わった」「表情豊かに接した」のように情緒的な関わり方に加え、「楽しく遊べるように工夫した」「分かりやすい言葉で話した」「目の高さを合わせて接した」「危険を取り除いた」のように保育者による対象者の発達へ

の配慮に基づいた行動もあり、下位となった5項目は「わたしの意思を尊重した」「わたしのペースを大事にした」「忍耐強く付き合った」「わたしの自立の手助けをした」のように対象者が保育者に受容されたと実感するような関わり方であると考えられる。また、「月齢・年齢に応じて

表8 対象者の被保育体験

n=215

| 幼児への関わり方      | n (%)      | 幼児への関わり方      | n (%)      |
|---------------|------------|---------------|------------|
| わたしのペースを大事にした | 86 (40.0)  | 分かりやすい言葉で話した  | 151 (70.2) |
| わたしを認める言葉をかけた | 103 (47.9) | 表情豊かに接した      | 139 (92.6) |
| 楽しく遊べるように工夫した | 155 (72.1) | 目の高さを合わせて接した  | 119 (55.3) |
| 忍耐強く付き合った     | 86 (40.0)  | わたしの意思を尊重した   | 75 (34.9)  |
| 個人差や個性を認めた    | 107 (49.8) | 月齢・年齢に応じて関わった | 72 (33.5)  |
| 危険を取り除いた      | 119 (55.3) | わたしの自立の手助けをした | 89 (41.4)  |
| 愛情を持って関わった    | 126 (58.6) | わたしに合った関わりをした | 96 (44.7)  |
| その他           | 13 (6.0)   |               |            |

関わった」のように、保育者の専門性を生かした関わりについても、被保育体験として意識がなされていない。このことから、保育者による上位5項目のような情緒的な関わり方や対象者の発達への配慮に基づく関わり方は幼少期の子どもに認識されやすい一方、下位5項目のような受容的な関わり方は認識されにくいことが推測される。

また、対象者の保育者への好感度が現在どのくらいであることを明らかにするために、「その保育士・幼稚園教諭のことを今、あなたは好きですか」の質問への回答を求めている。最も多い回答は「とても好き」75名(34.9%)であり、「まあ好き」が69名(32.1%)、「どちらでもない」が66名(30.7%)、「あまり好きではない」が3名(1.4%)、「まったく好きではない」が2名(0.9%)である(表9)。「とても好き」「まあ好き」を合わせると144名であり、全体の6割を超える(67.0%)ことから、保育者のことを比較的好きな人が多いといえる。しかし、幼少期の「とても好きだった」92名、「好きだった」92名などの結果(計184名, 85.6%)と比較すると、幼少期に比べ現在の保育者への好感度は低下している。

表9 現在の保育者への好感度

n=215

| 好感度   | とても好き     | まあ好き      | どちらでもない   | あまり好きではない | まったく好きではない |
|-------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| n (%) | 75 (34.9) | 69 (32.1) | 66 (30.7) | 3 (1.4)   | 2 (0.9)    |

さらに、対象者が幼少期に保育者にどのように関わられたと認識しているかと、そのときの保育者への好感度に関連があるのかを明らかにするために、「保育士・幼稚園教諭はあなたにどう関わりましたか」と「保育士・幼稚園教諭のことをあなたは好きでしたか」の回答について相関分析を行う。

分析の結果、14項目すべてにおいて有意な正の相関が認められる(表10)。このことから、項目に挙げたような保育者の幼児への関わり方と、幼児の保育者への好感度についても関連があるといえる。

表10 対象者の被保育体験と幼少期の保育者への好感度との関連

|                         |            | 保育士・幼稚園教諭はあなたにどう関わりましたか |               |               |               |
|-------------------------|------------|-------------------------|---------------|---------------|---------------|
| 保育士・幼稚園教諭のことをあなたは好きでしたか | 項目         | わたしのペースを大事にした           | 分かりやすい言葉で話した  | わたしを認める言葉をかけた | 表情豊かに接した      |
|                         | 相関係数       | .341**                  | .353**        | .356**        | .410**        |
|                         | 項目         | 楽しく遊べるように工夫した           | 目の高さを合わせて接した  | 忍耐強く付き合った     | わたしの意思を尊重した   |
|                         | 相関係数       | .360**                  | .241**        | .258**        | .311**        |
|                         | 項目         | 個人差や個性を認めた              | 月齢・年齢に応じて関わった | 危険を取り除いた      | わたしの自立の手助けをした |
|                         | 相関係数       | .356**                  | .175**        | .276**        | .178**        |
| 項目                      | 愛情を持って関わった | わたしに合った関わりをした           |               |               |               |
| 相関係数                    | .459**     | .308**                  |               |               |               |

\* : p<.05, \*\* : p<.01

「わたしの自立の手助けをした」の2項目では、有意ではあるもののほとんど相関はなく、幼児を理解し幼児の成長を促す関わり方・保育者の配慮は、被保育者には理解が難しく、それゆえに保育者への好感度を高める要因とはならないと考えられる。

## 3. 4 対象者の幼児への関わり

ここでは、対象者が普段の幼児との関わりをどのように認識しているかを明らかにするために、「これまでのあなたの幼児への関わり方についてお聞きします。各内容について当てはまるものに○をしてください」の質問について5件法での回答を求めている。平均値が最も高いのは、「愛情を持って関わる」(4.44)、次いで「分かりやすい言葉で話す」(4.33)であり、反対に平均値が最も低いのは「幼児の自立の手助けをする」(3.77)、次いで「月齢・年齢に応じて関わる」(3.98)である(表11)。平均値の高い項目は、「愛情を持って関わる」「分かりやすい言葉で話す」のように、対象者自身の思いや行動によって自己評価することが容易な項目であるといえる。一方、平均値の低い項目は、「幼児の自立の手助けをする」「月齢・年齢に応じて関わる」のように、対象者が幼児の育ちを考慮した上で、自らの関わりが適切であったかを評価しなければならないため、自己評価することが比較的困難な項目であると考えられる。このことから、自身の思いや行動そのものに対する評価は高いものの、関わる対象(幼児)への影響をも考慮に加える関わりについては、自己評価が低くなることが推察される。

表11 幼児への関わりの自己評価の平均

n=213

| 項目             | 幼児のペースを大事にする  | 分かりやすい言葉で話す   | 幼児を認める言葉をかける | 表情豊かに接する     |
|----------------|---------------|---------------|--------------|--------------|
| $\bar{X}$ (SD) | 4.18 (0.64)   | 4.33 (0.65)   | 4.29 (0.70)  | 4.23 (0.80)  |
| 項目             | 楽しく遊べるように工夫する | 目の高さを合わせて接する  | 忍耐強く付き合う     | 幼児の意思を尊重する   |
| $\bar{X}$ (SD) | 4.26 (0.74)   | 4.33 (0.76)   | 4.19 (0.68)  | 4.15 (0.76)  |
| 項目             | 個人差や個性を認める    | 月齢・年齢に応じて関わる  | 危険を取り除く      | 幼児の自立の手助けをする |
| $\bar{X}$ (SD) | 4.20 (0.75)   | 3.98 (0.80)   | 4.26 (0.77)  | 3.77 (0.89)  |
| 項目             | 愛情を持って関わる     | その子に合った関わりをする |              |              |
| $\bar{X}$ (SD) | 4.44 (0.67)   | 4.15 (0.82)   |              |              |

## 3. 5 対象者の被養育体験と対象者自身の幼児への関わりとの関連

対象者が幼少期、養育者にどのように関われたと認識しているかと、現在の自分の幼児への関わり方の認識に関連があるかを明らかにするために、「その人(主たる養育者)はあなたにどう関わりましたか」と「これまでのあなたの幼児との関わり方についてお聞きします。各内容について当てはまるものに○をしてください」の回答について相関分析を行う。

分析の結果、対応する項目間で有意な正の相関が認められたのは、14項目中「忍耐強く付き合った」-「忍耐強く付き合う」、「個人差や個性を認めた」-「個人差や個性を認める」、「愛情を持って関わった」-「愛情を持って関わる」、「わたしに合った関わりをした」-「幼児に合った関わりをする」の4項目である(表12)。これらは「個人差や個性を認める」「幼児に合った関わりをする」のように幼児を受け入れつつ、「忍耐強く付き合う」「愛情を持って関わる」のように幼児と丁寧に関わることを示す項目である。このことから、幼少期に養育者から受容的かつ丁寧に関わられたと認識していることが、現在の幼児への関わりにそのまま投影されていることが示唆される。

また、ここでの分析で相関の認められた「愛情を持って関わる」は、「3. 2 対象者の被養育体験と幼少期の養育者への好感度との関連」の分析においても、正の相関が認められている。このことから、本研究の対象者は、幼少期に養育者から愛情を持って関われた体験を好意的に受け止め、それが養育者への好感度と結びつくとともに、青年期現在、今度は自分が幼児に愛情を持って関わろうとしているものと推察される。

表12 対象者の被養育体験と対象者自身の幼児への関わりとの関連

|         |               |              |               |          |               |              |               |
|---------|---------------|--------------|---------------|----------|---------------|--------------|---------------|
| 被養育体験   | わたしのペースを大事にした | 分かりやすい言葉で話した | わたしを認める言葉をかけた | 表情豊かに接した | 楽しく遊べるように工夫した | 目の高さを合わせて接した | 忍耐強く付き合った     |
| 対象者の関わり | 幼児のペースを大事にする  | 分かりやすい言葉で話す  | 幼児を認める言葉をかける  | 表情豊かに接する | 楽しく遊べるように工夫する | 目の高さを合わせて接する | 忍耐強く付き合う      |
| 相関係数    | 0.12          | 0.013        | 0.126         | 0.127    | 0.123         | 0.123        | 0.150*        |
| 被養育体験   | わたしの意思を尊重した   | 個人差や個性を認めた   | 月齢・年齢に応じて関わった | 危険を取り除いた | わたしの自立の手助けをした | 愛情を持って関わった   | わたしに合った関わりをした |
| 対象者の関わり | 幼児の意思を尊重する    | 個人差や個性を認める   | 月齢・年齢に応じて関わる  | 危険を取り除く  | 幼児の自立の手助けをする  | 愛情を持って関わる    | 幼児に合った関わりをする  |
| 相関係数    | 0.079         | 0.235**      | 0.128         | 0.126    | 0.129         | 0.175*       | 0.241**       |

\* : p&lt;.05, \*\* : p&lt;.01

### 3. 6 対象者の被保育体験と対象者自身の幼児への関わりとの関連

対象者が幼少期に保育者にどのように関わられたと認識しているかと、現在の自分の幼児への関わり方の認識に関連があるのかを明らかにするために、「保育士・幼稚園教諭はあなたにどう関わりましたか」と「これまでのあなたの幼児との関わり方についてお聞きます。各内容について当てはまるものに○をしてください」の回答について相関分析を行う。

分析の結果、対応する項目間で有意な正の相関が認められたのは、14項目中「わたしを認める言葉をかけた」-「幼児を認める言葉をかける」、「表情豊かに接した」-「表情豊かに接する」、「楽しく遊べるように工夫した」-「楽しく遊べるように工夫する」、「目の高さを合わせて接した」-「目の高さを合わせて接する」、「危険を取り除いた」-「危険を取り除く」、「愛情を持って関わった」-「愛情を持って関わる」、「わたしに合った関わりをした」-「幼児に合った関わりをする」の7項目である(表13)。これらは「表情豊かに接する」「愛情を持って関わる」のように幼児との情緒的な関わりを示す項目であり、また、「楽しく遊べるように工夫する」「目の高さを合わせて接する」「危険を取り除く」等のように関わる対象である幼児に配慮した具体的な行動項目である。このことから、幼少期に保育者から情緒的に関わられたことや幼児であった対象者を配慮した保育者の具体的な行動を認識していることが、現在の幼児への関わりにもそのまま投影されていると考えられる。

また、ここでの分析で有意な相関が認められる「幼児を認める言葉をかける」「表情豊かに接する」「楽しく遊べるように工夫する」「愛情を持って関わる」「幼児に合った関わりをする」の5項目は、「3. 3 対象者の被保育体験と幼少期の保育者への好感度との関連」の分析においても、正の相関が認められている。このことから、幼少期に保育者から愛情を持って情緒的に関わられた体験や自分に配慮した保育者の具体的な行動を好意的に受け止め、それが保育者への好感度と結びつくとともに、今度は自分が幼児に愛情を持ち、幼児のことを配慮しながら行動し、関わろうとしていると推察される。

さらに、「3. 5 対象者の被養育体験と対象者自身の幼児への関わりとの関連」と「3. 6 対象者の被保育体験と対象者自身の幼児への関わりとの関連」のいずれにおいても、対象者自身の幼児への関わりは対象者自身の被養育・被保育体験と関連している。しかし、その項目数をみると、被養育体験と有意な相関が認められる項目は4項目であり、被保育体験と有意な相関が認められる項目は7項目である。このことは、養育者から受けた養育体験よりも、保育者から受けた保育体験の方が、対象者自身の幼児への関わりにも強く影響を及ぼしている可能性を示している。このことから、対象者は養育者よりも保育者を幼児と関わる上でのモデルとしていることが示唆される。

表13 対象者の被保育体験と対象者自身の幼児への関わりとの関連

|         |               |              |               |          |               |              |               |
|---------|---------------|--------------|---------------|----------|---------------|--------------|---------------|
| 被養育体験   | わたしのベースを大事にした | 分かりやすい言葉で話した | わたしを認める言葉をかけた | 表情豊かに接した | 楽しく遊べるように工夫した | 目の高さを合わせて接した | 忍耐強く付き合った     |
| 対象者の関わり | 幼児のベースを大事にする  | 分かりやすい言葉で話す  | 幼児を認める言葉をかける  | 表情豊かに接する | 楽しく遊べるように工夫する | 目の高さを合わせて接する | 忍耐強く付き合う      |
| 相関係数    | 0.07          | 0.052        | 0.172*        | 0.220**  | 0.164*        | 0.187**      | 0.133         |
| 被養育体験   | わたしの意思を尊重した   | 個人差や個性を認めた   | 月齢・年齢に応じて関わった | 危険を取り除いた | わたしの自立の手助けをした | 愛情を持って関わった   | わたしに合った関わりをした |
| 対象者の関わり | 幼児の意思を尊重する    | 個人差や個性を認める   | 月齢・年齢に応じて関わる  | 危険を取り除く  | 幼児の自立の手助けをする  | 愛情を持って関わる    | 幼児に合った関わりをする  |
| 相関係数    | 0.102         | 0.124        | 0.129         | 0.195**  | 0.117         | 0.304**      | 0.262**       |

\* : p<.05, \*\* : p<.01

## 4. おわりに

本研究は、幼児期の被養育・被保育体験が養育者・保育者への好感度、自身の幼児への関わりとに与える影響について検討したものである。その結果、幼児期の被養育・被保育体験が養育者・保育者への好感度と自身の幼児への関わりにも及ぼす影響について明らかにすることが出来た。しかし紙面の都合上、幼児期の被養育・被保育体験が「対象者自身がふさわしいと考える幼児との関わり」とどのように関連するのか、また、その「対象者自身がふさわしいと考える幼児との関わり」が自身の幼児への関わりにもどのように影響を及ぼすのか、についての分析には至っていない。

今後、上記課題を含む、被養育・被保育体験と幼児への関わりに関する分析を行い、「技術・家庭」等における「保育」教育・学習等に寄与するデータの提供が望まれる。

なお、本研究は、平成28年度上越教育大学卒業研究（成田鮎子）において収集されたデータについて、再分析・再検討を行い、筆頭執筆者が中心となり執筆されたものである。

本研究にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。

### 引用文献

- (1) 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領」 pp.117-128.
- (2) 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説 技術・家庭編」 pp.42-48.
- (3) 大竹美登利他（2016）「技術・家庭 [家庭分野]」開隆堂 pp.42-49.
- (4) 佐藤文子, 金子佳世子他（2016）「新編 新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して」東京書籍 pp.200-211.
- (5) 汐見稔幸他（2016）「新技術・家庭 家庭分野」教育図書 pp.52-57.
- (6) 岡野雅子（2005）乳幼児とのふれ合い体験についての一考察—大学生の省察資料による検討—, 教育実践研究：信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 6, pp.1-10.
- (7) 前掲 (6)
- (8) 伊藤葉子・倉持清美・岡野雅子・金田利子（2010）中・高・大学生の幼児への共感的応答性の発達とその影響的要因, 日本家政学会誌, 61(3), pp.129-139.
- (9) 藤後悦子（2007）子どもへのナーチュランスを育む発達教育プログラムが中学生の学校生活・地域関係に与える効果, 保育学研究, 45(2), pp.122-132.
- (10) 鯨岡（2006）『ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性』 pp.58-114.
- (11) 岡野雅子（2003）青年期女子の子どもに対するイメージ彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連—：日本家政学会誌 Vol.46 No.1 pp..3-13.
- (12) 前掲 (2)
- (13) 前掲 (3)
- (14) 前掲 (4)
- (15) 前掲 (5)



# The influence a person's experience of being brought up by parents and teachers in early childhood has on favorable feelings towards those people, and on their own care of children.

Chinatsu YOSHIZAWA\* · Ayuko NARITA\*\*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the influence of a person's experiences in early childhood on favorable feelings towards parents and teachers, and on their own care of children. The subjects of this study were university students. The students considered how they had been brought up in their childhood by their parents and nursery or pre-school teachers, as well as how they take care of children currently, and evaluated these. The results of the analysis are as follows:

1. When the subjects were children, many had high favorable feelings towards their parents and nursery or pre-school teachers. Further, those feelings continue even now.
2. Recognizing that the subjects were reared well by their parents, or nursery or pre-school teachers, was one of the factors that increases favorable feelings towards parents, or nursery or pre-school teachers.
3. There was some relationship between how the subjects were reared by their parents and nursery or pre-school teachers and how they take care of children currently. That is to say, how the targets were reared had an influence on how they take care of children. In addition, it appeared that, for the subjects, nursery or pre-school teachers were closer to the ideal of a child rearing person than parents.